



8月21日の活動に参加していた皆さん。大人に混じって力いっぱいボールを追う子どもたちが楽しそうでした。ちなみに「I.B.C」というクラブ名の由来は「いいたて・べこ・くらぶ」だそうです！

仲間とともに  
その5

フットサルの愛好会です

I・B・C (アイビージー)



活動データ

- 時 毎週水曜日の午後7時～9時
- 所 県青少年会館の体育館
- 料 無料
- 小学生から40歳代の大人まで、約30人が所属。お盆休みには、県外避難のメンバーも参加し練習を楽しみました

I・B・Cはフットサルのクラブ。活動を始めて10年程になります。避難後は子どもたちの保護者から活動再開を望む声が上がリ、川俣町の小学校の体育館を借りて再始動。現在は県青少年会館の体育館を利用しています。

「今はまず体を動かせることが一番。子どもたちには、離れてしまった友達に会える機会にもなっています」と、代表の大内亮さん(八木沢・芦原)。毎回来てるといふ中学生は「一週間に一度の楽しみです」と汗がまぶしい笑顔で教えてくれました。

避難先で咲き出荷期を迎えたトルコギキョウ

表紙の赤石澤忠則さん・久代さん夫婦(上飯樋)は、福島市荒井に土地を借り、村が整備した栽培ハウス9棟で、村民を雇用しながらトルコギキョウを栽培しています。7月下旬のこの日は市場への出荷を控え、花の調整が行われていました。

久代さんは「出荷を迎えて喜びも感じましたが、やりたくてもできない仲間のことを考えると複雑です」と胸の内を語ります。忠則さんも「村で皆でやってきた、あのにぎやかさが無いのは寂しい。『いいたて』の名前が入った箱で出荷できるようにしたいね」と話し、また「村内で花き栽培ができる環境を整備してほしい。その日のために栽培技術を維持していきたい」と思いを語りました。

村では、復興交付金事業等を利用して、避難先での営農再開を支援しています。赤石澤さんのように、支援により花き栽培用



嶋原清三さん(写真右端・長泥)は4棟の栽培ハウスで。妻の利江さん(左端)、娘の幸江さん(中央)と共に出荷準備

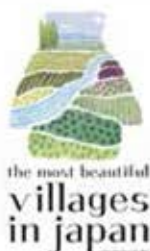


福島市内でトルコギキョウを栽培する高橋幸吉さん・たい子さん夫婦(長泥)。ハウスの中は花の香りでいっぱい

のパイプハウスを設置し、トルコギキョウを栽培する農家は現在6軒。それぞれの避難先で栽培に取り組み出荷期を迎えました。

表紙 出荷期を迎えたトルコギキョウ

避難先でトルコギキョウを栽培する赤石澤忠則さん・久代さん夫婦。隣の記事もご覧ください。



飯館村は「日本で最も美しい村」連合に加盟しています。